私　と　き　の　こ

千葉県衛生研究所医薬品研究室 西條 雅明

本会に入って既に 3 年目になる。私は、店頭販売されているきのこは抵抗無く触ることはできるが、以前はなじみの無い（自生しているほとんどのもの）きのこについては、鑑別後でさえ進んで触れることを避けていた。こんな私が本会に入ったことには訳がある、1）職場で毒物について注目していたことと、2）マジックマッシュルームが麻薬に指定されたこと、3）きのこについてはまだまだわからないことが多く、山渓カラー名鑑“日本のきのこ”に収載されているきのこも全体の一部に過ぎないと知ったこと、以上がその理由である。

中でも私を一番突き動かしたことは、私が漠然と“日本のきのこ”があれば大体のことは判るのだろうと思っていた考えが、全く違ってたと気づかされたことである。もちろん今では、グロテスクなものでない限り、きのこを触って観察を楽しんでいる。ちょっとは、きのこに近づけたのかもしれない。

私にもきのこの思い出がある。それは私が当時学生で、所属していた細菌専門の研究室でのこと。そこの机には、度々いろいろなきのこが置いてあった。どうやら学部生らが、きのこ好きである助教授に鑑定してもらうために持ち込んだもののようだった。中には可食のきのこもあって、バター炒めにしたものを 2，3 度頂いたことがあった。おっかなびっくり食べていたため、今となっては何を食べたかは覚えていないし、美味しかったという記憶も無い。ただ、翌日まで生きた心地がしなかったことだけは覚えている。

夏が終わろうとしていたある日、机の上にとんでもないものが置かれていた。白くてまんまるくて…、そのまま放って置く事ができないようなきのこ、みなさんご存知のオニフスベであった。しかし、この時は研究室の誰一人、可食であるはずのこのきのこを調理する者はいなく、萎みきるまでそこに置かれていた。最初は、威厳たっぷりでみんなからちやほやされていた。しかし、日が経つに連れ小さくなると共に、表面がたんだんと黄ばんでゆき、そぉーっといなくなってしまった。夏の終わりに強烈なインパクトを残して去っていったのだ。それ以来、きのこというとまず学生時代に出会ったオニフスベを思い出す。そして、ときどき私の頭の中ではバランスボールのような白い球体がコロコロと転がりだすのである。あの白いプニョプニョ、突っ込みどころ満載なところが私はとても好きだ。今年は久しぶりにどこかで出会えることを楽しみにしている。

私の趣味は、トレッキングである．開始から終了まで、理屈抜きにすごいと思えるもの（高山植物や滝など）にたくさん出会えることが好きなのだ．さらにここに、きのこも判るようになったらきっと楽しいことだろう．いずれは、鍋を担いで登ることになるのかもしれない